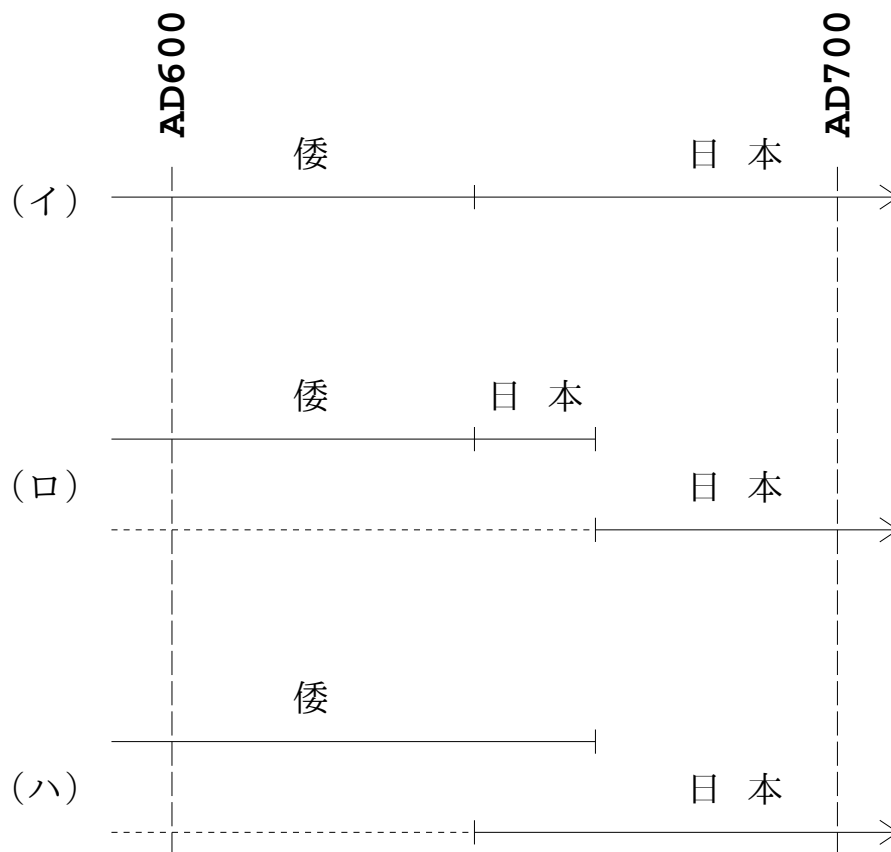


「地天泰分類」の進展
— 「倭国から日本国へ」 —

谷川清隆 (国立天文台)



一、はじめに、倭国から日本国への移行の三つのパターン

- 1。単線(イ)と新舊唐書が示唆する複線(ロ)、(ハ)。(ロ)、(ハ)は七世紀中に倭国と日本国が共存したことを示す複線の歴史である。それらの間の違いは倭国と日本国のどちらが先に「日本国」と名乗ったかと、どちらが生き残ったか、にある。
- 2。(ロ)では、倭国がその名前を嫌って日本国と名乗り、のちの日本国が、倭国の消えたあとに日本国と名乗った。
- 3。(ハ)では、倭国は倭国のまま消え、のちの日本国が倭国が消える前から日本国と名乗った。日本国の前身は、西暦六〇〇年以前にも存在したと思われるので、そのことを破線で示した。
- 4。倭国は七世紀中に消えてしまったので、八世紀には存在しない。

二、日本書紀七世紀、「地天泰」分類

項目 \ 群	天群	地群	天群	泰群
天皇紀	推古、舒明	皇極、孝徳、斉明、天智	天武上、下	持統
漢文の性質	β 群	α 群	β 群	—
天文観測	あり	なし	あり	食予測
屋久島との交流	あり	なし	あり	なし
隋唐への遣使	記載あり (隋書舊唐書東夷傳)	記載なし (舊唐書東夷傳)	—	—
語彙	多数の例あり			
冠位	十二階	十三階 \Rightarrow 二十六階	四十八階	—

1. $\alpha\beta$ 分類で持統紀がどちらにも属さないのは、「歌謡」がないので、中国語訳で分類できなかったから。
3. 天文記録で持統紀は「食予測」とあるが、観測でなく、日食予測記録であるから。天群、地群と違う。
4. 天武紀、持統紀に遣使はないし、持統紀に冠位制定はない。

三、講演の趣旨：「地天泰」分類から言えること

- 1。七世紀、日本列島には「地群の人々」、「天群の人々」が存在した。
- 2。天群の人々と地群では、使用する漢文や倭語（日本語）の語彙が違っていた。いわば、筑紫語と近畿語。
- 3。天群の人々は天文観測し、地群の人々は観測しなかった。
- 4。天群の人々は屋久島と交流し、地群の人々は交流しなかった。
- 5。天群の人々の遣使は隋書東夷傳、舊唐書東夷傳に記され、地群の人々の遣使は舊唐書東夷傳に記されなかった。
- 6。天群の人々は十二階の冠位を使い、地群の人々は十三階の冠位を使った。

四、結論: 倭国 ⇒ 日本国への移行は複線である

- 1。まず、地群の人々は誰？天群の人々は誰？
- 2。地群の人々は親新羅であり、天群の人々は反新羅である。
- 3。なぜなら、白村江の戦いの直前まで、地群の人々は遣唐使を新羅経由で送ったり、新羅の船に乗っていったりした。だから地群の人々には白村江で唐・新羅軍と戦う理由がない。
- 4。天群の人々は、「任那の支配権」をめぐる七世紀はじめから新羅と敵対していた。ときに軍隊を送ったり、送る準備をした。敵対関係は白村江の戦い直前まで続いた。よって、白村江で唐・新羅軍と戦った倭は天群の人々である。
- 5。地群の人々も天群の人々も冠位制度を持っていたからそれぞれ「国」を構成していた。
- 6。地群の人々は、のちの日本国の人々である。天群の人々は、中国が昔から知っている倭国の人々である。

五、各項目の説明

五、一 分類

日本書紀

二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十
推古	舒明	皇極	孝徳	斉明	天智	天武上	天武下	持統
群		群				群		—

- 1。分類は森博達 (1999、2011) による。
- 2。分類は日本書紀巻一から巻三十までにわたる。
- 3。 α 群は唐代の正格漢文で書かれた巻々、 β 群は倭習に満ちた漢文で書かれた巻々。
- 4。持統紀には「歌謡」がないので分類できなかった。

五、二 「地天泰」分類

日本書紀

二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十
推古	舒明	皇極	孝徳	齊明	天智	天武上	天武下	持統
天群		地群				天群		泰群
群		群				群		—

- 1。「地天泰」分類は、七世紀に関しては 分類に代わるものである。
- 2。「地天泰」分類は七世紀のみに関する日本書紀の巻分類である。
- 3。「地天泰」分類は、分類項目が多い。
- 4。「地天泰」分類は、分類項目が増える可能性がある。
- 5。泰群には意味がある。役目がある。

五、二、一 天文記録

項目 \ 群	天群	地群	天群	泰群
巻 天文観測	推古、舒明 あり	皇極、孝徳、斉明、天智 なし	天武上、下 なし、あり	持統 日食予測

1。「七世紀、日本天文学のはじまり」、谷川清隆、相馬 充 (2008):

2。史料

巻	紀	西暦	群	天文 観測	記録数	観測数
二十二	推古	629 - 641	天	あり	2	2
二十三	舒明	629 - 641	天	あり	7	7
二十四	皇極	642 - 645	地	なし	2	0
二十五	孝徳	645 - 654	地	なし	0	0
二十六	斉明	655 - 661	地	なし	0	0
二十七	天智	662 - 671	地	なし	1	0
二十八	天武上	672	?	なし	0	0
二十九	天武下	673 - 686	天	あり	13	13
三十	持統	686 - 697	泰		7	1

3。皇極元年の「客星入月」は隣国にない表現であり不審である。

4。皇極二年の「月食」は元嘉暦の予報でも観測できないし、当時の人はこの月食を見ていない。

5。天智三年の「有星隕於京北」は日付けもなく、やはり不審である。

五、二、二 屋久島との交流

項目 \ 群	天群	地群	天群	泰群
巻	推古、舒明	皇極、孝徳、斉明、天智	天武上、下	持統
屋久島との交流	あり	なし	なし、あり	なし

中国・朝鮮以外との交流. (谷川・渡辺 2010)

巻	紀	群	国際交流						
			屋久島	種子島	他島	隼人	耽羅	蝦夷	肅慎
二十二	推古	天	あり	なし	なし	なし	なし	なし	なし
二十三	舒明	天	あり	なし	なし	なし	なし	あり	なし
二十四	皇極	地	なし	なし	なし	なし	なし	あり	なし
二十五	孝徳	地	なし	なし	(吐火羅)	なし	なし	(あり)	なし
二十六	斉明	地	なし	なし	(都貨邏)	あり	あり	あり	あり
二十七	天智	地	なし	なし	なし	なし	あり	あり	なし
二十八	天武上	?	なし	なし	なし	なし	なし	あり	なし
二十九	天武下	天	あり	あり†	墮羅*	あり	あり	あり	あり
三十	持統	泰	なし	あり	なし	あり	あり	あり	なし

†多禰嶋人等 (天武6年、天武10年) がある. この「等」に誰が入るか不明.

1。屋久島との交流あるなしのみが、「地天泰」分類と合致する。

五、二、四 遣使

項目 \ 群	天群	地群	天群	泰群
卷 隋唐遣使	推古、舒明 記載あり (隋書舊唐書東夷傳)	皇極、孝徳、齊明、天智 記載なし (舊唐書東夷傳)	天武 —	持統 —

表 1: 推古・舒明紀における隋書東夷傳、舊唐書東夷傳の遣使記事

隋書 卷八十一 列伝四十六 東夷 倭国 開皇二十年(六〇〇)、倭王姓阿每、 字多利思比孤、號阿輩[老]彌、遣使詣闕。…	
隋書 卷八十一 列伝四十六 東夷 倭国 大業三年(六〇七)、其王多利思比孤遣使朝貢。… 隋書 卷八十一 列伝四十六 東夷 倭国 明年(六〇八)、上遣文林郎裴清使於倭國。… 於是設宴享以遣清、復令使者隨清來貢方物。 隋書 卷八十一 列伝四十六 東夷 倭国 此後遂絶。	
舊唐書 卷一百九十九 列伝一百四十九上 東夷 倭国 貞觀五年(六三一)、遣使獻方物。 太宗矜其道遠、敕所司無令歲貢、又遣新州 刺史高表仁持節往撫之。表仁無綏遠之才 與王子爭禮、不宣朝命而還。	

表 2: 舊唐書東夷傳と書紀の遣使記事

舊唐書 卷一百九十九 列伝一百四十九上 東夷 倭國	日本書紀
至 (貞觀) 二十二年 (六四八)、 又附新羅奉表、以通起居。	
対応記事なし	<p>孝徳白雉四年 (六五三) 夏五月辛亥朔壬戌 發遣大唐大使小山上吉士長丹、 副使小乙上吉士駒、…</p> <p>孝徳白雉五年 (六五四) 二月 遣大唐押使大錦上高向史玄理、 或本云、夏五月、遣大唐押使大花下高向玄理。 大使小錦下河邊臣麻呂、副使大山下藥師惠日、…</p> <p>齊明五年 (六五九) 秋七月丙子朔戊寅 遣小錦下坂合部連石布・大仙下津守連吉祥、 使於唐國。</p> <p>天智八年 (六七八)、 是歲、遣小錦中河内直鯨等、使於大唐。</p>

六、語彙

分野	研究者	卷								
		二二 推古	二三 舒明	二四 皇極	二五 孝徳	二六 斉明	二七 天智	二八 天武上	二九 天武下	三 持統
音声学	永田吉太郎	(三系)	-	——	(十四系)	——	-	-	-	-
国文学	太田善麿	—(イ)—		——	(ロ)	——	-	-	-	-
国語学	西宮一民	—(I)—		——	(II)	——	—(I)—			(II)
歴史学	藤井信男	—(5)—		——	(6)	——	—(7)—			(8)

1. 永田吉太郎(1935)は、歌謡に使われる漢字を、「相互共通仮名字数」および「相互共通仮名比率」の二種の統計表にまとめ、各巻の親疎の相関関係から三系・十四系の区別を得た。
2. 太田善麿(1942)は『古事記』と『書紀』の歌謡で使用される万葉假名の共通性からイ・ロの区別を得た。
3. 西宮一民(1951)も使用される歌謡假字で巻を分類し、I、IIの区別を得た
4. 鴻巣隼雄(1939)は百個近い語句を調査し分類に貢献した。
5. 藤井信男(1952)は天皇の即位・遷都に関する記事を使って書紀の巻を分類した。

谷川、渡辺 (2010、2013)

巻	紀	群	百寮	皇祖母	朝貢	不知 所如	啓	天文 曆
二十二	推古	天	あり	なし	あり	あり	あり	あり
二十三	舒明	天	あり	なし	あり	あり	あり	あり
二十四	皇極	地	なし	あり	なし	なし	なし	なし
二十五	孝徳	地	なし	あり	なし	なし	なし	なし
二十六	斉明	地	なし	あり	なし	なし	なし	なし
二十七	天智	地	なし	あり	なし	なし	なし	なし
二十八	天武上	?	なし	なし	なし	なし	あり	あり
二十九	天武下	天	あり	なし	あり	あり	あり	あり
三十	持統	泰	なし (地)	なし (天)	なし (地)	なし (地)	なし (地)	あり (天)

卷	紀	群	兆	童謡	讓位於	宗教		攝津
						沙門	〇〇僧	
二十二	推古	天	なし	なし	なし	なし	あり	あり
二十三	舒明	天	なし	なし	なし	なし	なし	あり
二十四	皇極	地	あり	あり	あり	なし	なし	なし
二十五	孝徳	地	あり	なし	なし	沙門	なし	なし
二十六	斉明	地	あり	あり	あり	沙門	なし	なし
二十七	天智	地	なし	あり	あり	沙門	なし	なし
二十八	天武上	?	なし	なし	なし	なし	なし	あり
二十九	天武下	天	なし	なし	なし	なし	あり	あり
三十	持統	泰	なし (天)	なし (天)	なし (天)	沙門 (地)	あり (天)	あり (天)

七、冠位 (谷川清隆: 2015年、日本書紀研究会発表)

天群	年 冠位数	推古十一年 (六〇三) 十二				天武十四年 (六八五) 四十八
地群	年 冠位数		大化三年 (六四七) 十三	大化五年 (六四九) 十九	天智三年 (六六四) 二十六	

1. 高句麗の冠位数

隋書 東夷 高麗: 凡十二等。

舊唐書 東夷 高麗: 總十二級。

新唐書 東夷 高麗: 官凡十二級

2. 百濟の冠位数

隋書 東夷 百濟: 官有十六品

3. 新羅の冠位数

隋書 東夷 新羅: 其官有十七等

舊唐書 東夷 新羅: 文武官凡有十七等

4. 倭国の冠位数

隋書 東夷 倭國: 内官有十二等

舊唐書 東夷 倭國: 設官有十二等。

5. 日本国の冠位数

舊唐書 東夷 日本國: 無記載

新唐書 東夷 日本: 其官十有二等。

註(谷川、2014より)

- (1) 谷川清隆 二〇一四、「『日本書紀』成立に関する一試案」、『日本書紀研究』第三十冊、塙書房、六七 - 九九。
- (2) 森博達 一九九九、『日本書紀の謎を解く』、中公新書、1502。一九九一、『古代の音韻と日本書紀の成立』、大修館書店。二〇〇三、「日本書紀成立論小結 併せて万葉仮名のアクセント優先例を論ず」『国語学』五四 - 三(二一四)、一頁 - 一五頁。
- (3) 森博達 二〇一一、『日本書紀成立の真実 書き換えの主導者は誰か』、中央公論新社。
- (4) 谷川清隆、相馬 充 二〇〇八、「七世紀の日本天文学」、国立天文台報第11巻、三一頁 - 五五頁。二〇〇九、「七世紀:日本天文学のはじまり」、岩波『科学』、科学の動向、七一三頁 - 七一五頁。
- (5) 谷川清隆、渡辺瑞穂子 二〇一〇、「七世紀の日本書紀の巻分類の事例 I」、国立天文台報 第13巻、一〇一頁 - 一一七頁。
- (6) 谷川清隆、渡辺瑞穂子 二〇一三、「七世紀の日本書紀の巻分類の事例 II」、国立天文台報 第15巻、七三頁 - 九四頁。
- (7) 永田吉太郎 一九三五、「日本紀歌謡の假名」、音声学協会会報 三六号、四頁 - 七頁。
- (8) 太田善麿 一九四二、「記紀の歌謡の假名の交渉」『歴史と

国文学』二六卷 三号。一九六二、『古代日本文学思潮論』III、桜楓社。

- (9) 西宮一民 一九五一、「神代紀の成立について」『芸林』第2卷2号、三一頁 - 四九頁。
- (10) 鴻巣隼雄 一九三九、「日本書紀の編纂について—特に使用語句を中心として見たる—」『日本諸学研究』[三]、日本文化中央聯盟、一頁 - 三〇頁。
- (11) 藤井信男 一九五二、「日本書紀各巻成立の一考察」『大倉山論集』第一輯、一〇六頁 - 一二一頁。
- (12) 谷川清隆 二〇一五、「『書紀』の区分と冠位」『日本書紀研究』、二〇一五年五月二十八日発表。